

2009.02.28

**飯箸泰宏**（明治大学）

# **独創性をつくるレポート指導**

TUTORIAL PROGRAM OF REPORT WRITING FOR THE POWER UP OF STUDENTS' ORIGINALITY

株式会社サイエンスハウス代表取締役

国士館・慶応義塾・法政・明治大学兼任講師

# 1. 自己紹介-私の40年（大学卒業後）

- 卒業後、化学系出版社に編集部員として9年10か月勤務。
  - 東大理学部情報科学科の研究生になり国井利泰教授に師事する。翌年、国井教授の勧めでシステムハウスを設立。
  - 1981年～現在まで株式会社サイエンスハウス代表取締役。
    - ・ 駿台電算機専門学校卒研指導員1年
    - ・ 電算機専門学校講師多数
    - ・ 中小企業大学校技術講師・経営講師延べ14年
    - ・ 大正大学/武蔵野美術大学/法政大学/明治大学/慶応大学/国土館大学でシステム系講師
  - 今、会社は後継者にほとんど任せきりで、教員三昧の日々。
- 最初の10年は出版人、後の30年はシステム屋である。
  - システム屋としての30年は、教員としての30年でもある。
  - 今回は、教員としての発表です。

## 2. 「独創性の学び」にもデザインはある

- ・ 常識のウソ

独創性は教えられない、勝手に身につけるもの

→No!



- ・ 学習戦略（学びのデザイン）があれば  
「独創性の学び」はある。

# 3. 実践課題はレポート作成

## テーマ

(現状では答えのないものが良い)

- 教師のテーマ

「日本語の起源」

「10年後の石油の価格」

- 自由テーマ

## レポートの流儀

木下是雄, レポートの組み立て方,  
269pp. 筑摩書房(1994)

## 木下是雄流レポートの目次

- メインタイトル

- 目次

- はじめに

× レポートを書く理由

結論の予告/推論の方法

- 本文

× 感情に基づくこじつけ

事実に基づく推論

- 結論

× 感想

論断

- 文献

引用文献/参考文献

## 4.計画概要

- 明治大学情報コミュニケーション学部専門情報リテラシー
- 1-2年生混在クラス、選択科目

- 2008年度、2回(前期・後期)の試行

- 「独創性の育成」は、レポートの作成の單元では、次の戦略で進められる。

(1)多量の知識の獲得

文献調査

(2)知識の構造化(メタ化・ネットワーク化、図1参照)

調査結果のまとめ

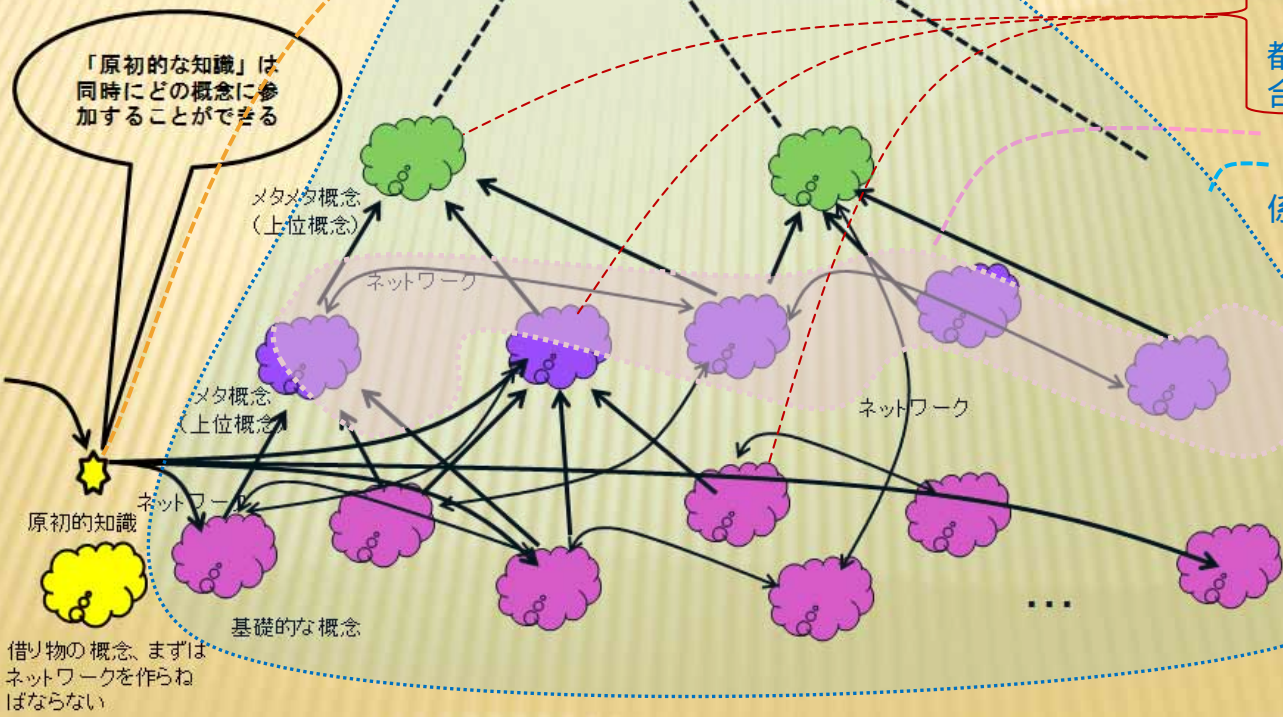
- ヒトの知識の知識ベース  
社会的脳は、社会の形を映している。

ヒトの知識は、メタ関係とネットワーク関係でできている

通常は一つの人格に統合される

図1 「ヒトの知識の飯箸モデル」と「記憶についてのスクワイア-飯箸モデル」の関係

- 原初的知識—1つの記憶
- トピックス知識—7つ以内程度の要素からなるお話
- エピソード記憶—構造化記憶の一部
- 都とネットワーク型記憶の一部を組み合わせた一つのまとめり
- 意味記憶—知識のネットワーク関係
- 階層化(メタ化)記憶—外延/内包関係のある縦型のみ



借り物の概念、まずはネットワークを作らねばならない

飯箸泰宏、「独創性をつくる試行錯誤」、情報コミュニケーション学会第4回研究会発表資料(2008.11.08)から

# 5.単元の進捗

## 2008年度、2回(前期・後期)の実践

- ・ 結論の予告
- ・ 推論の方法

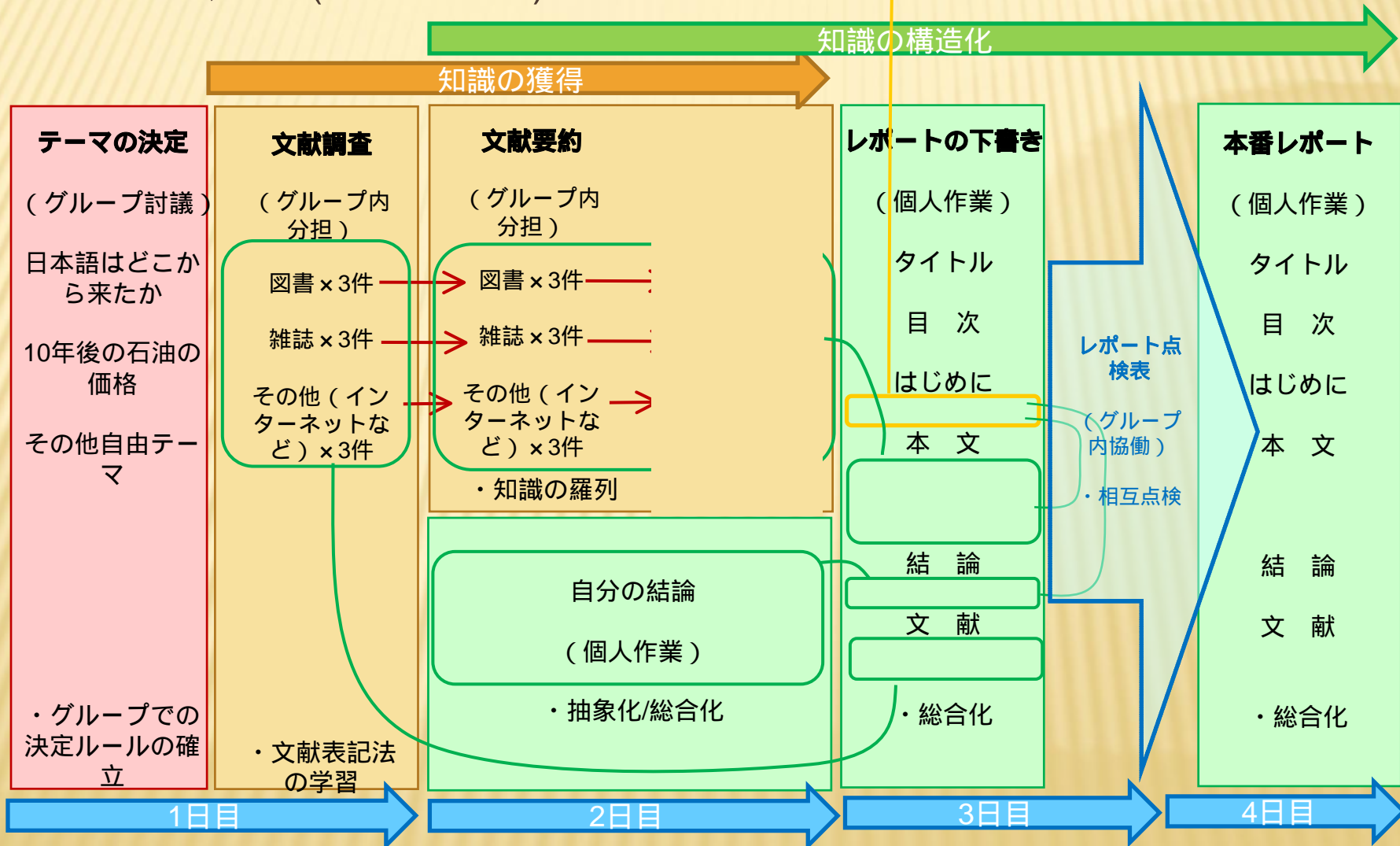


図1 レポートの書き方の単元の行程

# 6. 結果の比較

計画 (提示した課題)	種別	クルー1				比較	クルー2			
		週	出席	成果	平均成績		週	出席	成果	平均成績
(0)文献表記の教育	一斉講義			100%	--			100%	--	
(1)テーマの自主 選択	グループ 課題	1	32名	32名	100		1	17名	15名	
(2)文献調査と文 献リストの作成				100%					88%	
(3)文献の要約と それぞれの論評	多量の知 識を獲得 する過程		27名	21名	92	>		14名	9名	
(4)レポートの「結 論」の原案				要約だけ					66%	53%
(5)レポートの下書 き	知識を構 造化(メタ 化)および ネットワ ーク化する 過程	2	27名	15名	32	<	2	14名	7名	
(6)下書きレポート の相互評価				52%					41%	
(7)レポートの完成		3	25名	18名	45	<	3	9名	12名	
...				62%					71%	
最終講義時			22名	9名	62	<		9名	7名	
			27名	36%		<		9名	70%	
			27名					?		

図11 前期と後期の成果比較

## (補) 下書きレポートの相互点検を行う

- タイトル、目次、はじめに、本文、結論、文献

レポートの点検表  
所属クラス

学種番号		氏名																					
自分のグループメンバー全員が(自分も含む)のなげの、問題がある場合は必ず注釈を置く。																							
番号	学種番号	氏名	(a) タイトルは結論や本文と内容が合っているか、魅力的か	(b) 目次がただしく書かれているか(レポートの本体の見出しと対応しているか)	(c) 「はじめに」はただしいか 結論の予告は書かれているか 論証の方法は説明されているか	(d) 本文の内容 論拠となる文献の要約と論評がすべて含まれているか、他のメンバーのものも含む	(e) 結論 結論はタイトル、はじめに、と矛盾しないか、独創性は認められるか 結論は各要約に伴う論評のいずれとも矛盾しないか 結論には独創性が認められるか、他のメンバーのコピーは×	(f) 文献 本文中に利用されている文献はすべて書かれているか 引用文献と参考文献は、区別されているか 文献表記は正しいか															
0(自分)																							
1																							
2																							
3																							
4																							
5																							
6																							

- (a) タイトルは結論や本文と内容が合っているか、魅力的か
- (b) 目次がただしく書かれているか(レポートの本体の見出しと対応しているか)
- (c) 「はじめに」はただしいか
  - 結論の予告は書かれているか
  - 論証の方法は説明されているか
- (d) 本文の内容
  - 論拠となる文献の要約と論評がすべて含まれているか、他のメンバーのものも含む
  - 引用の元が明記されているか。引用が偏っていないか
  - 見出しが適切に付いているか(目次と対応しているか)

- (e) 結論
  - 結論はタイトル、はじめに、と矛盾しないか。独創性は認められるか
  - 結論は各要約に伴う論評のいずれとも矛盾しないか
  - 結論には独創性が認められるか。他のメンバーのコピーは×
- (f) 文献
  - 本文中に利用されている文献はすべて書かれているか
  - 引用文献と参考文献は、区別されているか
  - 文献表記は正しいか

## 7. 結論

- 対象: 「独創性を育てる」(レポートの作成)を目的とする単元。  
学びのデザイン=学習の戦略(=学びのデザイン)は有用であった。
- 学習戦略: 戦略には”攻略地図”が必要である。  
←ヒトの知能のモデルと知識構造モデルが有用であった。  
別発表もご参照ください。
- “知性なき丸暗記”から”知性ある知識獲得”へ  
←「多量の基礎知識の習得」だけでは、独創性は育たない。
- 個別の基礎的知識の習得の際には、「論評」を加える習慣が大切である。  
丸暗記ではなく、感想でもなく、・・・

---

**終わり**

# 8. (補足) ところで、・・・

## 脱落者の特性

## 脱落者の特性

### 1) レポートの作成上の問題がある者

- ・「はじめに」にレポートを書く動機を書いた者  
←原因:「結論」や「推論」の予告が書けない
- ・「結論」に”複数の要約”の要約を書こうとしてつまづく者  
←元の文書の趣旨が互いに矛盾している
- ・「結論」に”複数の論評”の要約を書こうとしてつまづく者  
←元の文書の趣旨が互いに矛盾している

### 2) グループ活動に参加できない者

- ・テーマをメンバーで一つに決めたり分担が決める能力がない  
(多数決、ジャンケン、アミダクジなど)
- ・リーダーシップを取るメンバーがいない
- ・他人の文書に疑問が生じてても、質問したり、討論したりすることができない。

矛盾を解決する  
方法がわからな  
い

ほぼ同一人物たち

# 9. 結論（その2）

## レポートの書き方を学ぶより前に

- (1) 多数決やジャンケンに習熟していなければならない
- (2) 仲間に質問したり、討論したりする練習が必要である
- (3) 仲間は怖くない、をしっかりと身につけておかなければならない
- (4) リーダーの必要性、決定参加への権利意識、決定への義務意識を醸成しなければならない
- (5) まずは、お手手つないでの幼稚園からのやり直しが必要である。

## 学生の感想

「今までのレポート課題についてだが、グループ活動であるが元々知らぬもの同士であったためか最低限のこと以外ほとんど話さず、もっと対話の必要性を感じた。」(2008/11/06)

[http://92660797.at.webry.info/200811/article\\_1.html](http://92660797.at.webry.info/200811/article_1.html)

2008年度新入生=「やりたくない課題はやらないことが正義である」(=ゆとり教育の産物?)

## (補足) レポートの課題(1クルー内):

1. 文献に基づくタイプ
2. 時系列データを基にしたモデル化検証タイプ
3. アンケート結果の解析による推論タイプ
4. SWOT法による自分分析・プレゼンテーションタイプ